

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 24 号 (令和 2 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIV, 2020

一切経音義による宮廷写経の用字についての
基礎的研究

李 乃 琦

一切経音義による宮廷写経の用字についての 基礎的研究

李 乃琦

1 はじめに

玄奘撰『一切経音義』（以下、「玄応音義」と略す）は唐代に成立し、現存する最古の仏典音義である。玄奘がインドからもたらした仏典を中国の長安の「訳場」で翻訳した際、その場で玄奘が翻訳された仏典の難字難語について注を施し編纂したものが、玄応音義である。玄応音義は約 500 部の仏典、10,000 弱の項目からなり、その項目はほぼ音注・義注・字体注からなっている。音注は唐代初期の長安音が反映されているため、中国語学の分野で重要視されている。義注は玄奘自身が施した義注の他は爾雅・論語などの約 300 種類の文献が利用された。特にその中、蒼頡篇・通俗文など佚書の利用は、現在における佚書の整理と研究に重要な材料を提供している。字体注は「経文作～」などの形式で記され、当時の仏典用字を弁別するものである。

玄応音義は全 25 巻で、前 20 巻は玄奘（645 年）以前の旧訳や古訳の仏典で、後 5 巻は玄奘の新訳仏典に注釈を施している。注意すべきは、「経文作～」という文字の異同を示す注釈の「字体注」が 1,224 条あり、それが前 20 巻にのみ存在することである。末木（1981）は「従来、『音義』は音韻学の方面から重視されていたが、経典の内容理解の為に十分に活用されることは少なかったように思われる。しかし、『音義』は難語の意味の解明というばかりでなく、現行経典と字句の相違も少なくないところから、経典の本文校勘資料としても無視できず、又、同じ語が処々にとりあげられている場合は一種の索引として活用することも可能である。」と指摘している。筆者は敦煌文献の調査を通して、仏典中の用語に玄応音義の字体

注と異なるものを発見した。しかし管見の限り、齟齬の原因や最初期の漢訳仏典における用語については、調査が及んでいない。

その為、本論では玄応音義を利用して、経典の古い形を伺うことを試みる。そもそも玄応音義の「経文作～」という字体注から、玄応音義の撰者玄応が参照した仏典を校訂して、正しい用語を掲出語としたことが窺える。そうであるとすれば、古写経の中には、玄応が校訂する前の仏典を伝えるものと、玄応が校訂した後の仏典を伝えるものの2種類が存するはずである。それにより、玄応音義の掲出語と字体注に基づき、古写経との照合を通して、宮廷写経の依拠本や、書写・伝播の実態を察する。

2 研究対象

2.1 玄応音義

前述のように、玄応音義は唐代に編纂された仏典音義であり、その成立年代については、いくつかの説が存する。劉葉秋の『中国字典史略』と林玉山の『中国辞書編纂史略』、錢劍夫の『中国古代字典辞書概論』はその成立年代を「唐太宗貞觀末年完成」とし、山田孝雄の『一切経音義刊行始末』では貞觀末曆(649年)に成立したと推測している。神田喜一郎の『緇流の二大小学家一智騫と玄応一』では龍朔元年～三年(661～663年)、陳士強の『佛典精解』では永徽六年(655年)～龍朔三年(663年)と推測する。徐時儀の『玄應「眾経音義」研究』は龍朔年間(661～663年)、于亭の『玄応「一切経音義」研究』は663年と推論している。いずれにしても、玄応音義は7世紀後半(660年前後)の成立と推測されている。

玄応音義は大蔵経の渡来と共に日本に伝来し、奈良時代には盛んに書写された。石田(1930)によると、玄応の著書が日本では天平九年(737年)に一部、天平勝寶三年(751)に二部書写されたとされる。現在、日本に所蔵されている写本は10種類以上であり¹、現存する諸本では正倉院本は

¹ 筆者は一切経音義日本古写本の諸本を照合するため、「一切経音義全文データベース」を構築した。データベースを作成するに際して、利用する10種類の玄応音義写本は正倉院聖語藏本、宮内庁書陵部藏大治三年本、金剛寺藏本、七寺藏本、西方寺藏本、東京大学史料編纂所藏本、京都大学文学部国語学国文学研究室藏本、

書写年代が最も古いものである。山田 (1932) によると、正倉院聖語藏にある玄応音義卷第六の断簡は天平頃の書写である。それにより、玄応音義が編纂された七、八十年後に、日本で書写されたと言える。

2.2 宮廷写経

本論における字体注の研究に際して、信用度が高くかつ成立年代が玄応音義に近いテキストを敦煌文献に求めると、該当するものに宮廷写経がある。宮廷写経については、藤枝氏が一連の研究があり、そのなかで藤枝 (1981) は、次のように述べている。

多くの通常の写本は、その原本をたどってゆけば、秘書省もしくはそれに準ずる宮廷写経所で写された宮廷写本に帰着する。幸いなことに敦煌・トルファン古写本群中には、そうした宮廷写本が数十点残っている。敦煌もトルファンも仏寺の蔵書だったもので、『五経正義』の類は小断片しか見られないが、道教の經典には長安の代表的道観で写された立派な写本がいくつかあり、さらに目立つのは、671~677年に長安の宮廷写経所で写された『妙法蓮華経』と『金剛般若波羅蜜経』との一群である²。

また、宮廷写経の成立について、藤枝 (1961) は「当時の両経のテキストの乱れを統一するために、高僧の校定になるテキストを政府が、一流の写字生たちに筆写せしめて全国に頒布したもの」と指摘している。

その為、本論では、藤枝 (1961) が言及した咸亨2年 (671) から儀鳳2年 (677) に至る間に長安の政府機関において書写された20点の『妙法蓮華経』を研究対象とし、検討する。以下、研究対象とする20点の宮廷写経を表で示す。

広島大学蔵本、天理図書館蔵本、高麗大蔵経本 (版本) である。

² 藤枝晃 (1981) 「楷書の生態」、『日本語の世界4 中国の漢字』、中央公論社、pp. 287-334。

表 初唐宮廷写経『妙法蓮華経』³

	文書番号	経題	日付	西暦	用紙	写経者/使	総字数
1	S.4353	法華一	上元 3.11.23	676	18	弘文館楷書 王智苑/閻玄道	8,180
2	S.3361	法華一	上元 3.7.28	676	18	門下省書手 袁元慈/閻玄道	8,572
3	P.4556	法華二	咸亨 3.2.25	672	20	經生 王思謙/虞昶	114
4	S.2573	法華二	咸亨 4.9.17	673	20	門下省群書手 封安昌/虞昶	7,960
5	S.2181	法華二	上元 3.4.15	676	20	群書手 楊文泰/閻玄道	6,008
6	S.3094	法華二	儀鳳 2.5.21	677	21	書手 劉意師/閻玄道	4,453
7	S.5319	法華三	咸亨 2.5.22	671	麻 19	書手 程君度/虞昶	8,909
8	S.4209	法華三	咸亨 3.4.15	672	小麻 19	門下省群書手 趙文審/虞昶	8,686
9	S.0456	法華三	咸亨 5.8.2	674	19	左春坊楷書 蕭敬/虞昶	5,676
10	S.2637	法華三	上元 3.8.1	676	19	弘文館楷書 任道/閻玄道	3,005
11	S.4168	法華三	上元 3.9.8	676	19	群書手 禹元禮/閻玄道	8,423
12	S.3079	法華四	咸亨 2.10.12	671	22	經生 郭德/虞昶	9,644
13	S.4551	法華四	咸亨 3.8.29	672	22	門下省群書手 劉大慈/虞昶	9,014
14	S.0312	法華四	咸亨 4.9.21	673	22	門下省群書手 封安昌/虞昶	3,556
15	S.0084	法華五	咸亨 2.10.10	671	21	經生 郭德/虞昶	6,176
16	S.1456	法華五	上元 3.5.13	676	21	秘書省楷書 孫玄爽/閻玄道	10,399
17	S.1048	法華五	上元 3.11.5	676	小麻 21	弘文館楷書 成公道/閻玄道	10,066
18	P.2195	法華六	上元 2.10.15	675	10	門下省書手 袁元慈/閻玄道	4,381
19	S.3348	法華六	上元 3.9.25	676	20	左春坊楷書 蕭敬	4,193
20	S.2956	法華七	上元 3.12.22	676	17	弘文館楷書 王智苑/閻玄道	2,101

2.3 玄応音義の『妙法蓮華経』

『妙法蓮華経』に対して施した注釈が玄応音義の巻第六に存在する。それは経典から難字難語を抽出して、音注・義注・字体注などを加えたものである。現存する玄応音義古写本と項目数をまとめると、次の表ようになる。

³ 池田 (2016) 「漢字字体史の資料と方法：初唐の宮廷写経と日本の古辞書」『北海道大学文学研究科紀要 (150号)』pp. 201-236。

表 玄応音義巻第六古写本

古写本	高麗本	七寺本	金剛寺本	西方寺本	京都大学本	正倉院本
項目数	429	429	428	191 (残巻)	438	113 (残巻)

項目数の異同については、まず西方寺本と正倉院本は残巻なので、項目数は他本より少ない。また、京都大学本と正倉院本のみ見られ、他本では見られない項目が8条あり、それらを「独自項目」と呼称する。(旃檀、瞻察、純一、懈怠、族姓、蕭笛、籥、□止天日衆) これらの内容については、別稿で述べる⁴。

本来、玄応音義は660年前後漢訳仏典に基づいて、長安で編纂されたものである。撰者の玄応は「訳場」の「字学大徳」として一定の標準性を持ち、信用度が高い経典を依拠したことは容易に想像できる。一方、宮廷写経は政府がテキストの乱れを統一するため、高僧の校定になるテキストを、671～677年に長安の宮廷写経所で書写したものである。両方ともほぼ同じ時代に長安で成立したものであり、このことから、玄応音義と宮廷写経とは同じ経典を利用したことが十分に考え得る。しかしながら、筆者の調査により、両者の齟齬が複数例見出された。

そのため本論ではまず、玄応音義の『妙法蓮華経』の掲出語と字体注を全て取り上げ、次に、それに対応する宮廷写経での用字を確認し、最後に、それらの例を生じた要因を解明するために、様々な可能性を検討し考察する。

3 「経文作～」の具体例

玄応音義における『妙法蓮華経』に対する注釈では「経文作～」⁵などの字体注は計34例ある。例えば、1番目の項目を一覧で示すと、次の通り

⁴ 李乃琦 (2019) 「正倉院本『一切経音義』について」『東京大学日本語学論集』第15号、pp. 143-159。

⁵ 研究便宜のため、本論では玄応音義の高麗本の用字を基準として検討する。高麗本と異なる用字を「注」で示す。

である⁶。

玄応 (掲出語) : 欄楯

玄応音義の注釈 : 力干反。謂鉤欄。字體作闌。『説文』: 門、遮也。經文作蘭、香草也。楯、食允反。『説文』: 楯、闌檻也。王逸注『楚辭』云 : 檻、楯也。從曰檻、横曰楯。(注釈の傍線部が筆者による)

玄応 (字体注) : 蘭

大正蔵の記述 : 駟馬寶車 欄楯華蓋

大正蔵用字 : 欄楯

敦煌文献 : S. 3361 (676年) : 欄楯

敦煌文献 : S. 4353 (676年) : 欄楯

用字の異同がある計 34 例をまとめると、次の表のようになる。

妙法蓮華経卷第一							
番号	1	2	3	4	5	6	
玄応 (掲出語)	欄楯	柔奕	肴膳	露幔	無礙	犛牛	注
玄応 (字体注)	蘭	濡	餽餽	縵	閔	猫牛、猫牛	露幔 : 金剛寺本 「受幔」
大正蔵用字	欄楯	柔軟	餽餽	露幔	無礙	犛牛	
S.3361 (676年)	欄楯	柔軟	餽餽	露幔	无閔	猫牛	
S.4353 (676年)	欄楯	柔軟	餽餽	露幔	无礙	猫牛	
妙法蓮華経卷第二 (1)							
番号	7	8	9	10	11	12	13
玄応 (掲出語)	珍玩	婉誕	褻落	蛻蛇	咀嚼	揶揄	蓬勃
玄応 (字体注)	翫	蜿蟺	弛	虺	齧	齷	燧焮

⁶ 本論では、玄応音義からの引用に当たって、原文の字体を用いることを原則とする。論文の引用に当たって、康熙字典体で書かれた日本語論文は常用漢字体に改めることとしたが、一部は原文のままにした。中国語論文は原文のままにした。中国人名のように姓だけでは分かりにくい場合は、敬称を省略し、姓名を記す。

大正蔵用字	玠玩	紈綖		褊落	蚺蛇	咀嚼	齷掣	燧焮
S.2573 (673年)	玠玩	紈綖	𠄎𠄎	𠄎𠄎	𠄎𠄎	咀嚼	齷掣	燧焮
S.2181 (676年)	玠玩	紈筵	𠄎𠄎	𠄎𠄎	𠄎𠄎	咀嚼	齷掣	燧焮
S.3094 (677年)	玠玩	紈綖	𠄎𠄎	𠄎𠄎	𠄎𠄎	咀嚼	齷掣	燧焮
妙法蓮華経卷第二 (2)								
番号	14	15	16	17	18	19	20	
玄応 (掲出語)	梨躡	駝駝	婁陋	背偃	瘖瘖	伶俜	草庵	注
玄応 (字体注)	梨	駝	婁	偃	瘖	伶	菴	經文作婁： 金剛寺本 「經文作座」
大正蔵用字	梨躡	駝駝	婁陋	背偃	瘖瘖	伶俜	草庵	
S.2573 (673年)	梨躡	駝駝	婁陋	背偃	瘖瘖	伶俜	草庵	
S.2181 (676年)	梨躡	駝駝	婁陋	背偃	瘖瘖	伶俜	草庵	
S.3094 (677年)	梨躡	駝駝	婁陋	背偃	瘖瘖	伶俜	草庵	
妙法蓮華経卷第三								
番号	21	22						
玄応 (掲出語)	憺怕	城郭						
玄応 (字体注)	憺	郭						
大正蔵用字	憺怕	城郭						
S.4209 (672年)	憺怕	城郭						
S.5319 (671年)	憺怕	城郭						
S.0456 (674年)	憺怕	城郭						
妙法蓮華経卷第四								
番号	23	24	25	26	27			
玄応 (掲出語)	句逗	關關	無央	所往	椎鍾			注
玄応 (字体注)	誼讀	籥	鞅	住	槌			句逗： 金剛寺本 「句逗」
大正蔵用字	句逗	關關	無央	所往	槌鍾			
S.3079 (671年)	句逗	關關	无央	所往	槌鍾			
S.4551 (672年)	句逗	關關	无央	所往	槌鍾			
S.0312 (673年)					槌鍾			

妙法蓮華経卷第五								
番号	28	29	30	31	32			
玄応 (掲出語)	魁膾	新染	討伐	被精	憤夷			
玄応 (字体注)	儺	新淨	罰	披	鬧			
大正蔵用字	魁膾	新淨	討罰	被精	憤鬧			
S.0084 (671年)				披精	憤鬧			
S.1456 (676年)	魁儺	新染	討伐	披精	憤鬧			
S.1048 (676年)	魁儺	新染	討伐	被精	憤鬧			
妙法蓮華経卷第六								
番号	33							
玄応 (掲出語)	警欬							
玄応 (字体注)	警咳							
大正蔵用字	警欬							
P.2195 (675年)	𠄎口警欬							
S.3348 (676年)	𠄎口警欬							

本節では、それらの内容について具体的に分析する。

1. 欄・蘭

玄応音義：

欄楯：力干反。謂鉤欄。字體作闌。『説文』：門、遮也。經文作蘭、香草也。楯、食允反。『説文』：楯、闌檻也。王逸注『楚辭』云：檻、楯也。從曰檻、橫曰楯。

大正蔵：

駟馬寶車 欄楯華蓋

分析：

欄楯については、『仏教語大辞典』⁷では「欄楯：石垣、垣根。手すり。

⁷ 中村元 (1999) 『仏教語大辞典 (縮刷版)』東京書籍

玉垣のようなもの。仏塔の外側に欄楯を巡らすべきことが律に記してある。」である。また、『新纂浄土宗大辞典』⁸では次のような記述がある。

梵本『阿弥陀経』の「石垣」(Svedikā)に対する鳩摩羅什の訳語。古代インドでは樹木など信仰対象の周囲に巡らせ、聖と俗の境界とした木製ないし石製の垣があった。サーンチャーやアマラーヴァティなどでは、高さ三、四メートルの平柱を環状に掘り立て、各柱を貫石と笠石で固定し、四門を構え、一～三世紀には柱内外を浮彫で飾った。ガンダーラでは好まれず、小ストゥーパの基壇上に置いて本体を囲った例、大ストゥーパに列柱を巡らした例が一世紀に限って若干あるのみである。

また、『玉篇』では「木欄也。謂階際木句欄」とあり、大正蔵の記述の文脈から分析すると、「欄」は垣の意味をもつため、「欄」は正しい用字であると言える。

一方、蘭は『説文解字・卷一・艸部』では「香艸也。从艸闌聲。落干切」とあり、香草の一種類である。また、『詩経』では「芄蘭之支、童子佩觿。雖則佩觿、能不我知。容兮遂兮、垂帶悸兮。」と記述が始まり、後代の文献でも香草の一種類を指す。

まとめ：

玄応の依拠本は誤写である。玄応と宮廷写経は正確である。

2. 奕・濡・軟

玄応音義：

柔奕：而亮反。『廣雅』：柔、弱也。『通俗文』：物柔曰奕、作奕。『漢書』軟不勝任者作軟、二形通用、經文多作濡。案『説文』、『三蒼』皆人于反、水名也。出涿郡東、入漆。又霑也。或作溲、乃本反。『説文』：溲、湯也。二形並非經義。

⁸ <http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php>

大正蔵：

其聲清淨 出柔軟音 教諸菩薩 無數億萬

分析：

『玉篇』(車部)では「輓、柔也。軟、俗。」とあり、軟は輓の俗字である。また『集韻』では「或作輓。通作奕。」とあるから、輓はまた奕で表すことができる。『莊子・胠篋』では「故上悖日月之明、下燦山川之精、中墮四時之施、惛奕之蟲、肖翹之物、莫不失其性。」、屈原撰『離騷』では「攬茹蕙以掩涕。王逸注：茹、柔奕也。」、『書・堯典』では「鳥獸氄毛。孔安國注：鳥獸皆生奕毳無意間細毛以自溫焉。」とある。いずれも奕は軟と字体が異なるが、同じ意味であると説示している。

一方、濡は『字彙』では「與濡同。」とあり、別字のことであるとする。

まとめ：

玄応は誤写された經典を多く閲覽し、それを修正するために、掲出語に正字を掲示した。また宮廷写経の記述も正確であるといえる。

3. 肴膳・餽膳玄応音義：

肴膳：胡交反、下上扇反。『國語』云：飲而無肴。賈逵曰：肴、菹也。凡非穀而食之曰肴。『說文』：膳、具食也。『周禮』：膳用六牲。又云：膳夫。鄭玄曰：膳之言善也。今時美物亦曰珍膳。『廣雅』：肴、膳肉也。字體皆從肉、善是聲。經文有從食作餽膳二字、檢無所出、傳寫悞也。

大正蔵：

餽膳飲食 百種湯藥

分析：

『史書・東觀漢記』([東漢]60年~160年)では、「明德皇后既處椒房、太官上飯、累餽膳備副、重加幕覆、輒撤去、譴敕令與諸舍相望也。」とあり、『神仙傳・卷三・王遠』では「入拜方平、方平為之起立。坐定、召進行廚、皆金玉杯盤無限也、餽膳多是諸花果、而香氣達於内外、擘脯而行之松栢炙、雲是鱗脯也。」とある。

まとめ：

肴膳と餽膳は正しい用字であるが、餽膳の用例が見られない。玄応の依

拠本と宮廷写経の用字は誤写の可能性があると考えられる。

4. 幔・縵

玄応音義：

露幔：莫半反。『説文』：幔、幕也。在傍曰帷、在上曰幕。幕、覆也。露、覆露也。案諸經中珠交露蓋、珠交露車同其事也。經文有作縵。『説文』縵帛無文者也。縵非正體。

大正藏：

珠交露幔 寶鈴和鳴

分析：

『説苑』（〔西漢〕公元前 206 年～9 年）劉向著『脩文』では「天子束帛五匹、玄三纁二、各五十尺、諸侯玄三纁二、各三十尺、大夫玄一纁二、各三十尺、元士玄一纁一、各二丈、下士綵縵各一匹、庶人布帛各一匹」とあり、『春秋・繁露』（〔西漢〕公元前 206 年～9 年）董仲舒著『度制』では「古者天子衣文、諸侯不以燕、大夫衣祿、士不以燕、庶人衣縵、此其大略也。」とある。これらにより、縵は庶民の着る服の材料であるといえる。それに対して、幔は縦にだんだらの筋のある幕を指す。これらについての記述は次の通りである。

『墨子・卷五・非攻下』（〔春秋戰國〕公元前 490 年～公元前 221 年）では「然而又與其車馬之罷弊也、幔幕帷蓋、三軍之用、甲兵之備」とあり、『後漢書・列傳・虞傳蓋臧列傳』（〔南北朝〕420 年～445 年）では「紹盛帷幔、大會諸將見洪。」とある。

まとめ：

玄応は誤写の經典を閲覽した。玄応の掲出語と宮廷写経は正確である。

5. 礙・閔

玄応音義：

無礙：古文礙、同。五代反。『説文』：礙、止也。『廣雅』：礙、閔也。經文作閔、亦古文礙字也。『小爾雅』：閔、限也。『説文』：午代反。外閔也。又作導、音得。『説文』：得、取也。『尚書』高宗夢傳說是也。案衛宏『詔定古文官書』云導、得二字同體、導非此用。

大正蔵：

無量無礙力無所畏。禪定解脫三昧。

分析：

閔は『集韻』では「紇則切、音効。礙也。」とあり、『説文解字』（段玉裁注）では「外閉也。有外閉則爲礙。从門。亥聲。五漑切。一部。」とある。

まとめ：

閔と礙は異体字であり、両方とも正しい用字である。

6. 犛・猫玄応音義：

犛牛：亡交反。『説文』：西南夷長鬣牛也。今隴西出此牛也。經文作猫、猫二形、今人家所畜以捕鼠者是也。猫非經義。

大正蔵：

著於五欲、如犛牛愛尾、以貪愛自蔽、盲瞶無所見

大正蔵脚注：犛=猫『博』、猫『敦』⁹

分析：

猫は『篇海』では「莫包切、音毛。牛也。」とあり、『龍龕手鑑』では「猫耗牦俗六今犛正莫包反说文牦也又力之反亦牛也八字。」とある。

まとめ：

犛と猫は異体字であり、両方とも正しい用字である。

7. 翫・玩玄応音義：

珍玩：古文翫、同。五喚反。『字林』：玩、弄也。『廣雅』：玩、好也。

『尚書』：玩人喪德、玩物喪志。孔安國曰：以人爲戲弄、則喪其德；以物爲戲弄、則喪其志也。經文作翫習元翫、非體也。

大正蔵：

種種珍玩奇異之物。情必樂著。

⁹ 略符：『博』東京帝室博物館本、『敦』敦煌本、『宋』宋本、『元』元本、『明』明本、『三』宋、元、明三本、『宮』宮内省図書寮本（舊宋本）。

分析：

翫は『説文解字』では「習馱也。从習元聲。『春秋傳』曰：「翫歲而愒日」五換切」とあり、『荀子・禮論』（[戦國] 公元前 475 年～公元前 221 年）では「故死之為道也、不飾則惡、惡則不哀；余則翫、翫則厭、厭則忘、忘則不敬。」とある。

まとめ：

翫は見下してひどい扱いをするという意味であるが、玩は珍しい物を指す。

8. 紈縵・蜿蠕玄応音義：

紈縵：諸經有作蜿蠕二形。『字林』：一遠反、下以旃反。相承云坐縵也、未詳何語立名耳。

大正蔵：

重敷紈縵安置丹枕。

大正蔵脚注：紈縵＝紈筵『宋』『元』、蜿筵『明』、縵_口糸筵『宮』

分析：

嘉祥大師吉蔵（549～623 年）の『法華統略』では「紈縵者、此間字書、未見其事。云是外国縵縮繡。大富家重敷蓐上也。」とある。また蜿は『集韻』・『韻會』では「烏丸切」とあり、『正韻』では「烏歎切、音劓。蠕、龍蛇動也。」とある。蠕は『集韻』では「同蠕。」、『説文』では「動也。」とある。

まとめ：

紈縵は名詞でカーペットのような敷物を指し、それに対して、蜿蠕は形容詞で虫の動き方を指す。そのため、蜿蠕は誤用である。

9. 褹・阨玄応音義：

褹落：直紙、勅尔二反。『廣雅』：褹、斂也。『説文』：奪衣也。字從衣虍聲。經文作阨、除蟻反。『方言』：阨、壞也。『説文』：小崩曰阨。阨亦毀也。斂音奪。虍音斯。

大正蔵：

泥塗褌落 覆苦亂墜

大正蔵脚注：褌 = 阤『元』『明』『宮』、墜『博』

分析：

褌は『唐韻』では「池爾切」『集韻』・『韻會』で「丈爾切、音多。奪衣也。」、『韻會』では「直吏切、值去聲。解也、脱也。」とある。阤は『説文』では「小崩也。」、『玉篇』では「毀也、落也。」、『周語』では「聚不阤崩、而物有所歸。註：大曰崩、小曰阤。」、『集韻』では「或作阤阤。」とある。

まとめ：

両方とも壊す、落とすの意味があるので、いずれも正しい用法である。

10. 蛇・虵・虺玄応音義：

虵蛇：案字義、古文作虵。『字林』：五官反。蛇醫也。崔豹『古今注』：蝮蛇、一曰蛇醫。大者長三尺、其色玄紺、善彪人。一名玄蝮。『漢書』玄虵、韋昭曰：玄、黑。虵、蜥蜴也。經中言黑虵、疑此物也、而不言毒害人、未詳的是。諸經多作虺、吁鬼反。

大正蔵：

虵蛇蝮蝎 蜈蚣蚰蜒

分析：

虵は『唐韻』では「俗蛇字。」とある。虺は『廣韻』では「蛇虺。」、『詩・小雅』では「維虺維蛇、女子之祥。』『爾雅・釋魚』では「蝮虺。詳蝮字註。又王虺。』、『楚辭・大招』では「王虺奮只。註：王虺、大蛇。」とある。

まとめ：

この三字は異体字であり、いずれも正字である。

11. 咀・齧玄応音義：

咀嚼：『字林』作齧。『説文』作咀、口。才與反。含味也。『蒼頡篇』：咀、嚙也。『通俗文』：咀齧曰嚼。音才弱反。『字林』：咀、齧也。經文

作齶、齶也。齶音仕白反。

大正藏：

咀嚼踐蹋 齶齶死屍

分析：

齶は『説文』では「齶也。」、『史記・灌夫傳』では「魏其必内愧、杜門齶舌自殺。」とある。

用例：

- ①『西南紀事』：觀者齶舌。
- ②『陳書』：吾以圭璋玉帛、通聘來朝、屬世道之屯期、鐘生民之否運、兼年累載、無申元直之祈、銜泣吞聲、長對公閭之怒、情禮之訴、將同逆鱗、忠孝之言、皆應齶舌、是所不圖也、非所仰望也。
- ③『舊唐書・卷九十八』：雖復伯玉沮顏、追謝於元凱、蔣濟貽恨、失譽於王陵、犀首沒齒於季章、曹瞞齶舌於劉主、當何及哉！孔子曰：「予欲無言。」

まとめ：

両字は同じく噛むの意味を表す。用字が異なる。

12. 搯・齶・齶・植

玄応音義：

搯掣：作搯。『字林』：側加反。『釋名』云：搯、又也。謂五指俱往又取也。經文有作齶。『説文』：齒不正也。齶非此義。掣或作摩、同。充世反。『字林』：掣、拔也。『書』：掣、牽也。『釋名』云：掣、制也。制頓之使順己也。

大正藏：

由是群狗 競來搏撮 飢羸惓惶 處處求食 鬪諍齶掣 哇喋嚙吠 其舍恐怖

大正藏の脚注：齶 = 植 『三』『宮』『博』

分析：

植は『説文』では「搯也。从手且聲、讀若植梨之植。又『揚子・方言』搯搯、取也。南楚之間凡取物溝泥中謂之搯。或謂之。又『集韻』淺野切、音且。亦取也」とある。

齧は『説文』では「齧齒也。」、『廣韻』では「齧牙。」、『玉篇』では「齒不正。」とある。

齧は『正字通』では「俗齧字。」とある。

檀は『説文』では「木名。與粗同。似梨而酢。」、『莊子・天運篇』では「禮義、法度、其猶檀梨、橘柚耶、其味相反、而皆可于口。」とある。

まとめ：

大正蔵の記述の文脈から見ると、正しい用字は檀であり、動詞「取る」の意味を表す。大正蔵と宮廷写経の記述は誤用である。

13. 蓬勃・燧焮

玄応音義：

蓬勃：蒲公、蒲沒反。『廣雅』：勃、盛也。經文作燧焮、非也。

大正蔵：

飲血噉肉 野干之屬 竝已前死 諸大惡獸 競來食噉 臭烟燧焮

大正蔵脚注：燧焮 = 蓬勃 『宮』

分析：

燧は『集韻』では「蒲蒙切、音蓬。燧焮、煙鬱貌。又蒲蒙切、音擘。燧焮、火氣。」とある。蓬勃は『藝文類聚』(卷一・天部上・風・晉王凝之風賦) ([唐] 624年) では「起玄朔之重雲、驅東極之洪濤、越四溟而蓬勃、經五嶺而蕭條、其鼓水也。無川不涉、靡流不往、溟海天迴、江湖雲蕩。」とある。

まとめ：

蓬勃は(生命・生氣・勢力・活気・運動・興味・発展・生長などが) すさまじい、盛んである様、燧焮は火を燃やし、煙を立つ状態を指す。そのため、宮廷写経は正しい用字である。

14. 梨・黧・黧

玄応音義：

梨黧：案『方言』：面色似凍梨也。經文有作黧、力兮反。『字林』：黑黃也。『通俗文』：斑黑曰黧黧。『説文』：杜感反。一音勅感反。桑葚之黑也。今用於斬反者、借音耳。葚音甚。

大正蔵：

其影頰瘦 黧黧疥癩

大正蔵脚注：黧=梨『博』

分析：

黧は『説文』では「桑葚之黒也。」、『廣韻』では「黧黧、黒也。」、『玉篇』では「黧黧、不明淨也。」とある。

黧は黧の異体字であり、『玉篇』では「黒也。」、『廣韻』では「黒而黄也。」、『爾雅·釋鳥』では「倉庚、黧黄也。註：其色黧黒而黄、因名。又或作梨。」とある。また『戰國策』では「面目梨黒。又或作黎。」、『尚書·禹貢』では「厥土青黎。註：色青黒而沃壤。」とある。

梨は『方言』では「梨、老也。东齐曰眉、燕代之北鄙曰梨。」、『通俗文』では「班黒謂之梨黧。」、『釋名』では「九十曰鮐背、或曰冻梨皮、有斑点如冻梨色也。」とある。

まとめ：

三字の用字は異なるが、いずれも黒黄の意味を表す。

15. 駝・駱

玄応音義：

駝駝：又作駝。『字書』作駝、又作囊。『字林』：力各反。『山海經』音託。郭璞云：日行三百里、負千斤、知水泉所出也。性別水脈、以足踏地則泉出也。經文作駝、馬色也、白馬黒鬣曰駱、駱非今義。掙音蒲交反。

大正蔵：

若作駝駝 或生驢中

大正蔵脚注：駝=駱『博』

分析：

『玉篇』では「駱駝也。一作駝駝。」とある。駝は『玉篇』では「駝、驢父牛母。」、『本草』では「牡驢交牛生者爲駝。」、『崔豹·古今注』では「驢牡馬牝則生駝、即駝也。」とある。

用例：

- ①『鹽鐵論·力耕』：是以驢驢駝駝、銜尾入塞、驛駝駝馬、盡為我畜、驪貂狐貉、采旃文罽、充於内府、而璧玉珊瑚琉璃、成為國之寶。
- ②『前漢紀』：驢驪駝駝以十萬數。

- ③『方言・第七』：自關而西隴冀以往謂之駘、凡以驢馬駘駘載物者謂之負他、亦謂之駘。
- ④『群書治要・鹽鐵論』：驢騾駘駘、北狄之常畜也。
- ⑤『廣韻・落』：駘：駘駘。

駘は『説文解字』では「馬白色黑鬣尾也。从馬各聲。盧各切。」とある。

用例：

- ①『墨子・尚同中』：『詩』曰「我馬維駘、六轡沃若、載馳載驅、周爰咨度。」
- ②『詩經・四牡』：四牡駘駘、嘽嘽駘馬。
- ③『禮記・明堂位』：夏后氏駘馬、黑鬣。
- ④『新語・道基』：夫驢騾駘駘、犀象瑇瑁、琥珀珊瑚、翠羽珠玉。

明朝以後ほぼ「駘駘」の用字が定着した。

- ①『西遊記』：若説變山、變樹、變石塊、變土墩、變賴象、科豬、水牛、駘駘、真個全會。
- ②『金瓶梅』：駘駘燈、青獅燈駘無價之奇珍。
- ③『廣韻・駘』：駘：駘駘外國圖云大秦國人長一丈五尺好騎駘駘俗從也、餘同。

まとめ：

同じ意味であるが、駘は明朝以後の文献に多く見られる。そのため宮廷写経の記述は中国語学に重要な情報を提供できる資料である。

16. 𦍋・瘞

玄応音義：

徂戈反。『廣雅』：𦍋、短也。『通俗文』：侏儒曰短。經文作瘞、謂瘞癰也。『説文』：小腫也。瘞非此義。

大正蔵：

𦍋陋攣蹇盲聾背偃

大正蔵脚注：𦍋=瘞『博』

分析：

𦍋は『博雅』では「短也。」、『北史・宋世景傳』では「孝王學涉、形貌𦍋陋、而好臧否人物。」とある。

用例：

『抱朴子・内篇・塞難』(〔晉〕300年～343年)：

夫生我者父也、娠我者母也、猶不能令我形器必中適、姿容必妖麗、性理必平和、智慧必高遠、多致我氣力、延我年命；而或姪陋疴弱、或且黑且醜、或聾盲頑嚚、或枝離劬蹇、所得非所欲也、所欲非所得也、況乎天地遼闊者哉？

瘞は『説文』では「小腫也。一曰族瘞。徐曰：今別作瘵蠱、非是。」、『玉篇』では「癩也。」とある。

用例：

- ①『莊子・列御寇』：秦王有病召醫、破癰潰瘞者得車一乘、舐痔者得車五乘、所治愈下、得車愈多。
- ②『淮南子・詮言訓』：割瘞疽、非不痛也。
- ③『呂氏春秋・長見』：魏公叔瘞疾。

まとめ：

大蔵経の「姪陋攣蹇」という文脈から見ると、姪が正しい用字で、瘞は誤用である。

17. 偃・臚玄応音義：

背偃：『字林』一父反。『通俗文』：曲脊謂之偃僂。春秋『宋鼎銘』云：一命而僂、再命而偃、三命而俯。杜預曰：俯恭於偃、偃恭於僂、身逾曲、恭益加也。經文作臚。『字林』：一侯反。幽脂也。非今所取、又作癩、未見所出、疑傳寫誤也。

大正蔵：

姪陋攣蹇、盲聾背偃

分析：

偃は『説文』では「僂也。」、『左傳・昭七年』では「一命而僂、再命而偃、三命而俯、循牆而走。」とある。臚は『玉篇』では「久脂也。」、『集韻』では「一曰以脂漬皮。」とある。

まとめ：

臚は誤用であり、玄応音義掲出語と大正蔵は正しい用字である。

18. 瘖・喑玄応音義：

瘖瘖：一金、乙下反。瘖、不能言也。『埤蒼』：瘖、亦瘖也。經文作喑。一禁反。『字林』：喑、喑也。又作啞。『字林』：乙白反。笑聲也。『易』云「笑語啞啞」是也。二形並非字體。喑音子夜反。

大正蔵：

聾盲瘖瘖 貧窮諸衰

分析：

瘖は『説文』では「不能言病。」、『釋名』では「瘖、啞然無聲也。」、『禮・王制』では「瘖聾跛躄斷者侏儒、百工各以其器食之。疏：瘖謂口不能言。」とある。

喑は『説文』では「宋齊謂兒泣不止曰喑。又『六書故』失聲不能言謂之喑。」、『文子・上篇』では「臯陶喑而爲大理。」、『後漢・袁閔傳』では「遂稱夙疾、喑不能言。」とある。

まとめ：

両字はいずれも声が出せない状態を表す。そのため、両方とも正しい用字である。

19. 伶俜・踳踳玄応音義：

伶俜：歷丁、匹丁反。『三蒼』云：伶俜猶聯翩也。案伶俜亦孤獨兒也。經文多作踳踳。『字林』力生反。下補諍反。字與迸同。踳、不正也。迸、散也。二形並非今用。

大正蔵：

伶俜辛苦五十餘年

分析：

踳は『玉篇』では「踳踳、行貌。」「類篇』では「偏行。」、『廣韻』・『集韻』では「𨔵郎丁切、音靈。與踳同。亦作伶。徐行不正貌。」とある。

踳は『玉篇』では「散走也。或作踳。」、『集韻』では「必郢切、音餅。𨔵足立貌」とある。

伶は『唐韻』・『集韻』・『韻會』では「𨔵郎丁切、音零。獨也。又弄也。

伶人、弄臣也。又伶人、樂工也。伶倫、古樂師、世掌樂官、故號樂官爲伶官。」とある。

傳は『集韻』で「傍丁切、音潺。俠也。」、『説文』で「使也。」とある。

まとめ：

孤独の意味を表すのは伶傳であり、その一方で跼蹐は誤用である。

20. 庵・菴

玄応音義：

草庵：一含反。『廣雅』：庵、舍也。小屋之名也。經文作菴。菴、蘭草名也。

大正藏：

猶處門外 止宿草庵

分析：

菴は『韻會』では「菴閭、草名。」、『司馬相如・子虛賦』では「菴閭軒于。註：菴閭、蒿也。」、『本草』では「此草老莖可以蓋覆菴閭、故名。」とある。

庵は『玉篇』では「舍也、廁也。」、『廣韻』では「小草舍也。」、『集韻』では「園屋爲庵。」、「或作菴。」とある。

まとめ：

菴は一種類の植物を指し、庵は建物の名称である。しかし、草菴も建物様式を表すことができ、草庵と同じ意味となる。

21. 憺怕・憺怕

玄応音義：

憺怕：『字書』或作憺、同。徒濫反。『説文』：憺、安也。謂憺然安樂也。憺亦恬靜也。經文作憺、徒甘反。『説文』：憺、憂也。憺非此義。

怕、又作泊。『説文』：匹白反。無爲也。『廣雅』：怕、靜也。

大正藏：

其心常憺怕 未曾有散亂

分析：

玄応音義では「經文作憺、徒甘反。『説文』：憺、憂也。憺非此義。」とあるが、ほぼ全部の敦煌文献では「憺怕」と書かれている。その原因は

「愔」が多音字であるためであり、玄応の誤用であると思われる。『広韻』を調べた結果が次の通りである。

『広韻・下平声・談・談』愔：憂也。

『広韻・上声・敢・噉』愔：安緩。又徒濫切。

『広韻・上声・敢・噉』愔：上同。

『広韻・去声・闕・愔』愔：恬靜。徒濫切、又徒敢切、八。

『広韻・去声・闕・愔』愔：上同。

まとめ：

玄応音義で指摘されたように、「愔」には「憂也」の字義があるが、また「安緩」や「恬靜」の意味も表すことができる。そのため本例では玄応の記述が不適切と考えられる。

22. 郭・墉

玄応音義：

城郭：『世本』：觥作城郭。『公羊傳』曰：郭者、何恢郭也。經文有從土作墉、非也。觥音古本反。

大正蔵：

化作大城郭 莊嚴諸舍宅

分析：

墉は『集韻』では「光鏤切、音郭。」、『説文』では「度也。凡民之所度居也。」とある。前代の文献では「城墉」の用例が見られない。

まとめ：

城墉は異体字である可能性が高い。

23. 豆・逗・誼・讀

玄応音義：

句豆（金剛寺本は「句逗」である）

徒鬪反。『字書』：逗、留也。『説文』：逗、止也。『方言』：逗、住也。

經文有作誼、竹候反、順言也。誼非經旨。又作讀、未見所出。

大正蔵：

若於此經忘失句逗。

大正蔵脚注：逗 = 讀 『明』

分析：

誼は『集韻』では「丁切、音。與同。誼譎、不能言也。」とある。

讀は『説文』では「誦書也。」、『釋文』では「徐音豆。」、『増韻』では「句讀、凡經書成文語絶處謂之句。語未絶而點分之以便誦詠、謂之讀。今祕省校書式：凡句絶、則點於字之旁讀、分則微點於字之中間。」とする。

まとめ：

四字のうち、逗と讀は句読点の意味を持ち、その一方で豆と誼は誤用である。

24. 關・籥玄応音義：

關關：古文鑰、同。余酌反。『説文』：關、關下牡也。『方言』：關東謂之鍵、關西謂之關。經文作籥。『字林』：書僮笞也。何承天『纂文』云：關西以書篇爲書籥。籥非此義。笞赤占反。

大正蔵：

如却關鑰開大城門

分析：

鑰は『説文』では「本作關。關下牡也。」、『揚子・方言』では「戸鑰、自關而西謂之鑰。」、『抱朴子・至理卷』では「堅玉鑰於命門、結北極於黃庭。又通作籥。」とある。

用例：

- ①『論衡・感虛』：天何不令夏臺、羨里關鑰毀敗。
- ②『三國志・傅嘏傳』：鄧玄茂有為而無終、外要名利、内無關鑰、貴同惡異、多言而妬前。

一方、籥は『廣韻』では「樂器、似笛。」、『爾雅・釋樂』では「大籥謂之産、其中謂之仲、小者謂之約。註：籥、如笛、三孔而短小。」、『廣雅』では「籥、七孔。」とある。

用例：

- ①『墨子・備城門』：五十步一方、方尚必為關籥守之
- ②『呂氏春秋・十月紀』：關籥、固封璽、備邊境、完要塞、謹關梁、塞蹊徑、飭喪紀、辨衣裳、審棺槨之厚薄、營丘壘之小大高卑薄厚之度、

貴賤之等級。

- ③『國語・楚語下』：舊怨滅宗、國之疾眚也、為之關籥藩籬而遠備閑之、猶恐其至也、是之為日惕

まとめ：

古代では、關籥と關籥は両方使われている。

25. 央・鞅

玄応音義：

無央：於良反。梵言阿僧祇、此言無央數。央、盡也。經文作鞅、於兩反。『説文』：頸鞅。非此義。鞅音之列反。

大正蔵：

無央數劫 處處聽法

大正蔵脚注：央=鞅『博』

分析：

鞅は『説文』では「頸組也。」、『廣韻』では「牛羈也。」、『左傳・襄十八年』では「抽劔斷鞅。」、『釋名』では「鞅、嬰也。喉下稱嬰、言纓絡之也。其下飾樊纓、其形樊樊而上屬纓也。」とある。無央數は「阿僧祇」¹⁰のことを指す。

そのため、玄応音義が指摘する通り、「鞅」は誤字である。

まとめ：

鞅は誤字である。

26. 往・住

玄応音義：

所往：羽^反反。『廣雅』：往、至也。經文有作住、非也。

大正蔵：

在在所往 常爲聽法

¹⁰『精選版 日本国語大辞典』小学館(2005年)参照。

【阿僧祇】あそうぎ【名】(asamkhyāの音訳。無数、無央数と訳す)：①数えることのできないほど大きな数。②数の単位の一つ。一〇の六四乗。

まとめ：

往と住は字形が似ているので、誤写の可能性が高いと考えられる。

27. 椎・槌・搥玄応音義：

椎鍾：直追反。『説文』：椎、擊也。字從木。經文作槌。直淚反。關東謂之槌、關西謂之梘持、又作槌、都回反。槌、様也。二形並非字義。

持音篋。

大正蔵：

搥鍾告四方 誰有大法者

大正蔵脚注：搥鐘 = 椎鐘 『三』『宮』

分析：

椎は『集韻』では「傳追切、音追。通作槌。俗作栳。」、『説文』では「擊也。」とある。

槌は『正韻』では「直追切、音椎。擊也。」、『唐書・禮樂志』では「日未明、四刻槌一鼓、爲一嚴。二刻槌二鼓、爲再嚴。一刻槌三鼓、爲三嚴。」、『韓愈詩』では「作樂鼓還槌。別作槌。又與捶通。」とある。

まとめ：

三字は異体である。

28. 膾・儻玄応音義：

魁膾：苦回、下古外反。魁、師也。魁、首也。膾、切肉也。未詳所出立名。經文有作儻、『聲類』：儻、合市人。恐非此義。

大正蔵：

屠兒魁膾 畋獵漁捕

分析：

儻は『唐韻』・『集韻』・『韻會』・『正韻』では「𠵽古外切、音膾。牙儻、會合市人者。古借用會。」、『史記・貨殖傳節駟會註』では「駟馬儻也。會亦是儻。」とある。

膾は『慧琳音義』卷四『大般若經 (第四百〇二卷)』では「魁膾：上苦灰反。孔氏曰：魁、師 (帥) 也。」、『廣雅』では「主也。」とある。鄭註『禮

記』では「首也。」、王逸註『楚辭』では「大也。下古外反。」、『廣雅』では「膾、割也。案屠割牲肉之人名為 魁膾也。」、『説文』では「從鬼鬥聲也。前經第四卷已釋兩字也。」とある。

まとめ：

魁膾は首切りの意味で、さらに死刑執行人を指す。そのため、魁僧が誤用である。

29. 淨・染

玄応音義：

新染：經文有作新淨。『正法華』云：淨潔被服也。

大正蔵：

著新淨衣 内外俱淨

大正蔵脚注：淨 = 染 『博』

分析：

『妙法蓮華經玄贊¹¹』（窺基撰）：著新淨衣。浣故名淨。正法華云淨潔被服。此下復云内外俱淨。有作新染非也。

『妙法蓮華經釋文』（中算¹²撰）新淨：慈恩云。浣故名淨。正法華云。淨潔被服。此下又云。同外俱淨。或作新染非也。

まとめ：

両方とも經典での用例が多数見受けられる。しかし、染に関する『説文』以繪彩爲色。从水杂聲。徐鍇引裴光遠云：从水、水者所以染。从木、木者梳茜之屬。从九、九者染之數也。『周禮・天官』染人掌染帛。『爾雅・釋器』一染謂之纈、再染謂之纈、三染謂之纈。又柔貌。』という記述から見ると、新淨は正しい用法である可能性が高い。

¹¹ 中国、唐の慈恩大師窺基の著。『妙法蓮華經玄贊』の略称。10巻。法相宗の唯識学の立場から『法華經』を解釈したもの。

¹² 平安時代中期の法相宗の僧、生没年不詳。969年に没したとも、976年に没したとも伝えられている。

30. 伐・罰玄応音義：

討伐：古文討、同。恥老反。『漢書音義』曰：討、除也。『禮記』：叛者君討。鄭玄曰：討、誅也、伐也。『左傳』：有鍾鼓曰伐。『白虎通』曰：伐者何？伐敗也。欲敗去之也。經文作罰。『說文』：罪之小者曰罰。『廣雅』：罰、折伏也。罰非此義。

大正蔵：

起種種兵而往討罰。王見兵衆戰有功者。

大正蔵脚注：罰＝伐『三』『宮』『博』

分析：

伐は『唐韻』・『集韻』・『類篇』・『韻會』では「𠂔房越切、音罰。征伐。」とある。

罰は『說文』では「皋之小者。从刀从𠂔。未以刀有所賊、但持刀罵𠂔、則應罰。』、『春秋・元命包』では「罔言爲𠂔、刀𠂔爲罰。罰之言罔陷於害。」とある。

用例：

- ①『史記』：然挾王室之義、以討伐爲會盟主、政由五伯、諸侯恣行、淫侈不軌、賊臣篡子滋起矣。
- ②『漢書』：以偃甲兵於此、而息討伐於彼。

まとめ：

伐は敵をせめる意であるのに対して、罰は悪い行為に対する懲らしめの意である。そのため、罰は誤用である。

31. 被・披玄応音義：

被精：皮寄反。被謂被帶也。經文作披張之披。『方言』：披、散也。披非此義。

大正蔵：

被精進鎧發堅固意。

大正蔵脚注：被＝披『博』

まとめ：

被精は仏教經典でよく使われている。両字の字形が似ているので、誤写の可能性が高い。

32. 鬧・吏玄応音義：

憤吏：公對、女孝反。『説文』：憤、亂也。煩也。『韻集』：吏、猥也。

猥、衆也。字從市從人。經文有作鬧、俗字也。

大正藏：

捨大衆憤鬧 不樂多所説

分析：

鬧は『説文』では「不靜也。」、『廣韻』では「同吏。猥也、擾也。」とある。

吏は『玉篇』では「同鬧」、『廣韻・去聲・効・橈』では「不靜又猥也、擾也、鬧。」とある。

まとめ：

両字は異体字であり、両方とも誤用ではない。

33. 警・磬／欸・咳玄応音義：

警欸：口冷反。『説文』：警亦欸也。『蒼頡篇』：警、聲也。經文作磬、口定反、樂器也。磬非字體。欸、苦戴反。『説文』：欸、逆氣也。亦瘵也。經文作咳、胡來反。嬰咳也。咳非經義。瘵音蘇奏反。

大正藏：

一時警欸俱共彈指

分析：

警は『説文』では「欸也。」、『玉篇』では「欸聲也。」とある。

用例：

『莊子・徐無鬼』：夫逃虛空者、藜、藿柱乎黽、鼪之逕、踉位其空、聞人足音蹙然而喜矣、而況乎兄弟親戚之警欸其側者乎！

磬は『説文解字』では「樂石也。从石、聲。象縣虞之形。受、擊之也。古者母句氏作磬。」で、『龍龕手鑑・卷二』では「嚙嚙二俗口頂反」とある。

欬は『説文解字』では「𠂔气也。从欠亥聲」とある。

咳は『説文解字』では「小兒笑也。从口亥聲。」、『正韻』では「警欬、亦作咳。」とある。

まとめ：

四字のうち、警は誤用である。欬と咳は異体字である。

4 玄応音義と宮廷写経との関係

玄応音義の字体注において、異同のある注釈は33条ある。そのうち、「警欬」の注釈には字体注が2条あるため、計34例である。以下、これら異同のある34例を分類して、玄応音義と宮廷写経の関係を検討する。分析の便宜のため、本論ではアルファベットでこれら異文34条を分類する。玄応音義の掲出語を基準としてA類と記し、玄応音義注釈の字体注をB類とする。そして、宮廷写経について、玄応音義の掲出語と一致する内容をA類とし、玄応音義注釈の字体注と一致する内容をB類とする。どちらとも一致しない内容をC類、D類とする。また、「正誤」というのは、経典の文脈を分析した後、宮廷写経の用字が正確(○)であるか、誤用(×)であるかを判断したものである。全34例を分類すると、次の表のようになる。

		玄応掲出語	玄応字体注	宮廷写経	正誤
1	欄	A	B	A	○
2	奕	A	B	C	○
3	肴膳	A	B	B	○
4	幔	A	B	A	○
5	礙	A	B	AB	○
6	聲	A	B	AC	○
7	玩	A	B	A	○
8	純綆	A	B	A	○
9	褌	A	B	A	○

10	蛇	A	B	C	○
11	咀	A	B	A	○
12	搯	A	B	B	×
13	蓬勃	A	B	B	○
14	梨	A	B	C	○
15	駝	A	B	B	○
16	銜	A	B	B	×
17	僵	A	B	A	○
18	瘰	A	B	A	○
19	伶俜	A	B	B	×
20	庵	A	B	B	○
21	憚怕	A	B	B	○
22	郭	A	B	A	○
23	豆	A	B	C	○
24	鬪	A	B	AC	○
25	央	A	B	A	○
26	往	A	B	A	○
27	椎	A	B	BC	○
28	膾	A	B	B	×
29	染	A	B	A	×
30	伐	A	B	A	○
31	被	A	B	A	○
32	吏	A	B	B	○
33	譬	A	B	C	×
34	欸	A	B	CD	○

玄応音義と宮廷写経の用字の異同を比べると、その異同のパターンは表のように分けることができた。これらの数値自体には特別の意味はないが、用字の傾向を知ることができる。分類表に基づき分析した結果、次の結論が得られた。

- (1) 全 34 例の中、ABA 類は 14 例、全体の 41%。ABB 類は 10 例、全体の 29%。ABC 類は 4 例、全体の 12% を占める。
- (2) 全 34 例の中、○類は 28 例。×は全 6 例、×のうち、ABA 類が 1 例、ABB 類が 4 例、ABC 類が 1 例ある。
- (3) 数値によって、玄応音義と宮廷写経の依拠本が異なるのは明らかである。その理由は、まず ABA 類は 14 例、全体の 41% を占める。これは玄応音義が依拠した經典は宮廷写経との不一致率が 41% であるということである。さらに、正倉院本と京都大学本の玄応音義のみ、次の二つの項目が見られる。

〈籀〉立安反。古文。

〈𠄎止天曰𠄎〉漏皆反。新文。

前の項目：〈鵬鷲〉、後の項目：〈𧈧蛇〉

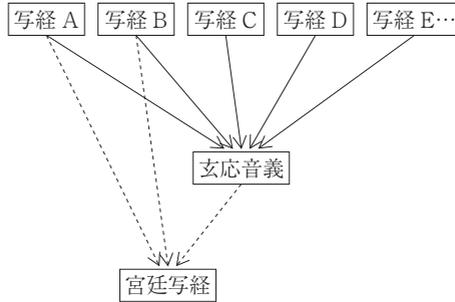
大正蔵：『妙法蓮華経』鵝臯雕鷲 烏鵲鳩鵠 𧈧蛇蝮蠍 蜈蚣蚰蜒

〈籀〉と〈𠄎止天曰𠄎〉は玄応音義では連続して掲載されたが、経文には見られない。また前後の項目である「鵬鷲」・「𧈧蛇」の間には「烏鵲鳩鵠」しか見られない。〈籀〉には「古文」の記述があり、これは書体である篆書の一つを指し、多くは大篆と一致する。〈𠄎止天曰𠄎〉の字形から考察するのは困難であるが、前の項目「古文」に対して、「新文」の注が施されている。書体は篆書から隸書へ展開したため、「隸」の可能性がある。また、反切や異体字との照合を行うと、〈𠄎止天曰𠄎〉は「隸」である可能性が高い。この二つの項目は書体に対する注釈であり、現在の宮廷写経や大正蔵には見られない¹³。そのため玄応が「〈籀〉と〈𠄎止天曰𠄎〉」の注記がある經典を参照した可能性がある。

- (4) さらに玄応音義の字体注には「経文多作～」、「経文有～」、「経文或作～」、「諸経有作～」、「諸経多作～」などの記述が多く見受けられる。これはそもそも玄応音義編纂時に同じ經典の多数写本を参照した証拠である。即ち玄応は網羅的に經典を閲覧した後、字体注をできるだけ多く参考・採録したのである。これも玄応音義を「仏教大辞典」としての全面的に編纂した玄応の方針であろう。
- (5) ABB 類は 10 例、全体の 29% を占める。この数値については、二つの可能性が考えられる。一つは玄応が参照した多数の中、宮廷写経の依拠本もその中に含まれていた可能性である。そのため玄応音義の字体注は宮廷写経と一致する。もう一つは宮廷写経の書写年代は玄応音義より新しく、さらに宮廷写経は標準性を求める文献であるため、玄応音義を参照して、字の訂正を行った可能性である。何故ならば玄応音義と宮廷写経は成立場所も年代もほぼ一致し、さらに玄応音義は当時において、最新かつ網羅的な文献であり、玄応も「字徳大師」として仏典漢訳にも参加したためである。
- (6) × は全 6 例、そのうち、ABA 類が 1 例、ABB 類が 4 例、ABC 類が 1 例ある。この中、注目すべきなのは宮廷写経の誤用の内容が 6 例あり、ABB 類が 4 例存在することである。これらの誤用の大部分は玄応音義の注釈で指摘されたものと一致する。この問題についても、また二つの可能性がある。一つ目は宮廷写経が玄応音義と同じ依拠本を利用した可能性、二つ目は宮廷写経が玄応音義の掲出語用字を採用しなかった可能性である。上記において、宮廷写経は玄応音義と異なる依拠本により成立したことが既に明らかになったため、二つ目の可能性のみが考えられる。即ち、宮廷写経を書写する際に玄応音義を一般的に利用したのではなく、意識的に一部分の内容のみ採用したのである。しかしながら、写経生の学力などにより、宮廷写経には一部分の誤用が残されてしまったと考える。

¹³ 李乃琦 (2019) 「正倉院本『一切経音義』について」『東京大学日本語学論集』第 15 号、pp. 143-159.

(7) 以上の結論によると、玄応音義と宮廷写経との関係は以下の図のように整理できる。



5 今後の課題

本論では研究の可能性を探るために、宮廷写経を中心に検討した。今後の課題として、3点が挙げられる。

まず第一は宮廷写経の書写時に写経生の字体意識によって用字も異なるため、写経生により宮廷写経を詳細に分類することである。各写本の異体率¹⁴に基づき、字体研究をより深く検討する。

第二は慈恩大師の『法華音訓』や、中算の『妙法蓮華経积文』などにも字体注が見られるため、それらを宮廷写経と対照し、宮廷写経の用字標準を解明することである。

第三は敦煌文献のみならず、日本古写経も研究対象とすることである。何故ならば、敦煌文献は現存最古(4~11世紀)の優れた仏教文献であるが、現存率から見れば研究に対して十分とは言えないからである。一方、日本に現存する奈良写経や平安写経は、大半が8世紀から13世紀にかけて唐代の忠実な複写本であると認められ、それらは敦煌文献と比較して相

¹⁴ 石塚他(2011)では「標準的文献には確かな字体標準が存し、それは異体率(異体字率)によって明示可能であり、次の式で算出する。(中略) 異体率 = 異体の総字数 / (文献の総字数 - 孤例の総字数) × 100」と指摘されている。

互補完的存在として扱われる。両者の対照的研究を通して、一切経の成立・伝播の経緯を遡ることが可能になるのである。

参考文献

【日本語著書・論文】

- 池田証壽 (2016) 「漢字字体史の資料と方法：初唐の宮廷写経と日本の古辞書」『北海道大学文学研究科紀要 (150号)』
- 石田茂作 (1930) 『寫経より見たる奈良朝佛教の研究』東洋文庫
- 石塚晴通・豊島正之・池田証壽・白井純・高田智和・山口慶太 (2005) 「漢字字体規範データベース」『日本語の研究』1巻4号
- 石塚晴通・池田証壽・高田智和・岡墻裕剛・斎木正直 (2011) 「漢字字体規範データベース (HNG) の活用 —漢字字体と文献の性格—」『じんもんこん 2011 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』
- 辛嶋静志 (2001) 『正法華経詞典』創価大学・国際仏教学高等研究所刊
- 末木文美士 (1981) 「『一切経音義』に見る『平等覚経』の難語」『印度学仏教学研究』通号59
- 神田喜一郎 (1933) 「緇流の二大小学家—智騫と玄応—」『支那学全集』第一巻
- 中村元 (1999) 『仏教語大辞典 (縮刷版)』東京書籍
- 藤枝晃 (1960) 『墨美 97 敦煌写経』墨美社
- 藤枝晃 (1961) 「敦煌出土の長安宮廷写経」『塚本博士頌寿記念仏教学論集』塚本博士頌寿記念会
- 藤枝晃 (1972) 「敦煌写本の編年研究」『学術月報』24巻12号
- 藤枝晃 (1977) 『文字の文化史』岩波書店
- 藤枝晃 (1980) 「表紙のことば 窓 敦煌写本 S. 388『字様』から 英国図書館蔵」『言語生活 (346号)』筑摩書房
- 藤枝晃 (1981) 「楷書の生態」『日本語の世界4：中国の漢字』中央公論社
- 山田孝雄 (1932) 「一切経音義刊行始末」『一切経音義索引』西東書房

【中国語著書・論文】

- 陳士強 (2000) 『中國佛教百科全書』上海古籍出版社

- 丁福保編纂(1922年編1984印刷)『佛學大辭典』文物出版社
方廣錫・(英)吳芳思主編;上海師範大學、英國國家圖書館合編(2011)
『英國國家圖書館藏敦煌遺書』广西师范大学出版社
黄永武主編(1989)『敦煌寶藏』驪江出版社
徐時儀(2005)『玄應「衆經音義」研究』中華書局
于亭(2009)『玄應「一切經音義」研究』中國社會科學出版社
張涌泉・黄征(1977)『敦煌變文校注』中華書局
張涌泉(1996)『敦煌俗字研究』上海教育出版社

【調査資料】

- 『宋本說文解字』國家圖書館出版社
『大廣益會玉篇』商務印書館
『高山寺古辞書資料一：篆隸万象名義・金剛頂經一字頂輪王儀軌音義』東
京大学出版会
一切經音義諸本：

- (1) 高麗藏經本：影印『高麗大藏經』、東国大学校、1976年
『高麗大藏經初刻本輯刊』、西南師範大學出版社、人民出版社、2012
年
- (2) 名古屋七寺藏本、金剛寺藏本、七寺藏本、西方寺藏本、東京大学史料
編纂所藏本、京都大学文学部国語学国文学研究室藏本：『日本古寫經
善本業刊第一輯「玄應撰一切經音義二十五卷」』国際佛教學大學院大
學學術フロンティア実行委員會編集發行、2006年
- (3) 宮内庁書陵部藏大治三年本、天理図書館藏本、広島大学藏本：『古辞
書音義集成「一切經音義」』、汲古書院、1981年
- (4) 正倉院聖語藏本：『一切經音義索引』、西東書房刊、1932年

【ウェブサイト】

- 漢字字体規範史データベース <http://www.joao-roiz.jp/HNG/> (現在停止中
の為、「CHISE IDS 漢字検索」<http://www.chise.org/ids-find> の連携
検索を利用)
中國哲學書電子化計劃 <https://ctext.org/>
International Dunhuang Project <http://idp.bl.uk/>

付記

本稿は2019年8月24日に北海道大学にて開催された漢デジ研究講演会における口頭発表を改稿したものである。当日は石塚晴通・池田証壽・永崎研宣教授よりご教示を賜わった。また2019年6月26日国際仏教学大学院大学仏教学特殊研究演習で報告した際に、落合俊典・藤井教公・斉藤明・デレアヌ フロリン・池麗梅の諸先生方から有益なご意見をいただき、不備を修正することができた。記して御礼申し上げます。

本研究は日本学術振興会科学研究費（課題番号：19F19008）による成果の一部である。

Summary

A Fundamental Study of glyphs from the Buddhist Scriptures Written at the Early Tang Imperial Court and *Xuanyingyinyi*

LI Naiqi

The *Xuanyingyinyi* 玄応音義 is the oldest Buddhist dictionary that exists in China. In the Tang Dynasty, Xuanzang 玄奘 brought many Buddhist scriptures from India to China. In order to translate these Buddhist texts, a “translation place 訳場” was set up in Chang’an 長安, and intellectuals were selected from among the monks, including Xuan Ying. Xuan Ying was conscious of the fact that there are many difficult words in the Buddhist scriptures, and made the dictionary in parallel with the translations. This dictionary was called *Yiqiejingyinyi* (*Xuanyingyinyi* 玄応音義), which has approximately 400,000 characters in a total of 25 volumes, taken from more than 400 Buddhist scriptures and more than 8,000 entries. Through *Xuanyingyinyi* 玄応音義, study the situation of transcript propagation of the Early Tang Imperial Court.

*International Research Fellow,
Japan Society for the Promotion of Science
Commissioned Research Fellow of 2019,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*